


 書評

野村総一郎, 中村 純, 青木省三, 朝田 隆, 水野雅文 シリーズ編集

野村総一郎 編

《精神科臨床エキスパート》

抑うつ の鑑別を究める

田中克俊

私がフレッシュマンとして入局して間もないころ、教授から「うつ病の中核は抑うつ症状であり、抑うつ症状の中核は抑うつ気分である」と教えられた。ところが、その数日後に行われた教授回診時のやりとりの中で、同僚のフレッシュマンが、「憂うつですか？ と伺ったら、患者さんがはいと答えられたので抑うつ症状があると判断しました」と答えたところ「そんなのは問診じゃない！」とひどく叱られてしまった。それを見ていた私たちフレッシュマンは「そんなにまずいこと？」とあたふた……。

後日、教授は、問診は患者さんの言葉を拾いながら行うべきであること、何十という気分や感情の表現方法があるように症状もそれぞれ違うのだから、こちらが勝手に決めつけてはいけないこと、そして、抑うつ気分があれば抑うつ症状で、抑うつ症状があるならうつ病だろうという単純な推論は絶対に避けるべきであることなどを話された。

演繹的推論だけではなく帰納法的推論も必要とされる精神科診断においては、可能な限り確かな問診と観察に基づく論理的な思考が求められる。確かに、抑うつ気分→抑うつ症状→うつ病という診断の流れは、とても自然な感じがして違和感がないが、前提となる精神症状に関する科学的知見の集積はいまだ十分ではない。一方、客観的なデータの解析ではなく、問診・観察という手段を使う精神科診断においては、自然と数々のバイアスが入り込むことも多い。最

初の段階で、うつ病かな？ と思ったら、たいていの症状は抑うつ症状に思えてしまうのもよくあることである。気分に関しても、だいたい精神科の外来にいらっしゃる方の中で憂うつな気分でない人を探すほうが難しいだろう。我々は、自然な流れに任せていると、多くの患者さん(患者さん扱いすべきでない人も含めて)を簡単にうつ病にしてしまう可能性がある。

本書は、“抑うつ”を呈する患者さんを可能な限り正確に観察し問診し、そして最新の知見を基に可能な限り理論的に診断に結び付けるための道筋を、余すところなく教えてくれる本である。特に、アパシーや陰性症状、自閉、ストレス反応など抑うつと類似した概念との鑑別についての説明は秀逸である。また、うつ病以外のさまざまな精神疾患にみられる抑うつ の鑑別や治療のポイントについての説明も非常に丁寧で、中でも各章に記載されている「特に鑑別が難しいケースとその対応」は、具体的な事例を取り上げながらマニュアルとは違う実践的な診立ての方法について多くの視点を示してくれる。

うつ病診療の混乱が叫ばれてから久しい。この混乱を整理するためにもぜひ読んでおきたい一冊である。

(北里大学教授・産業精神保健学)

●B5 244 頁 2014 定価：本体 5,800 円＋税
医学書院刊